

アフリカ現代史I

第6回

植民地支配の実態 (1)

はじめに

- 19C末から始まったヨーロッパ諸国によるアフリカ支配
- 当初から政治、経済、社会の改革に関する長期的展望を持っていたわけではない
- 植民地領土獲得の最大の目的 他の列強を締め出す
- 「文明の伝道」精神 支配哲学 「委任論」

1. 植民地支配の2形態

①直接統治・同化政策 アフリカ人の「教化」
フランス、ポルトガル、ベルギー等

フランス

「開化民」=市民的権利

「原住民」 非人間的処遇

②間接統治・分割統治

ヨーロッパとアフリカの文化が異なることを前提

イギリス

従来の支配構造を利用

2 直接統治・同化政策

- フランス 同化政策
- アフリカ人 文化でも市民としてもフランス的になることが期待される
- 植民地 フランスの州として運営される

- フランス植民地（セネガル、マリ、ギニア、コートジボアール、ブルキナファソ、ニジェール、ダホメ、モーリタニア）はダカールに本拠を置く総督の下で統治される
- 総督 様々な権限を集中
- 知事 総督の下に領土を総括

- 地方行政 行政単位 統治可能な地理的範囲に分割
- 行政区の長官 イギリスの植民地よりも大きな権限を直接行使

- フランス市民と「他のアフリカ人」の分割
- フランス政府 学校制度を管理
- 非市民 言論、移動、出版の自由なし、強制労働、直接税支払
- フランス人官吏

セネガル 「コミューン」

文化移転の壮大なプロジェクトの「実験」

- 「4つのコミューン」：サン・ルイ、ダカルル、ルフィスク、ゴレ
- フランスの自治体と同一の地位
- フランスの地方行政システムと学校制度導入
- アフリカ人の住民＝フランス市民、本国の下院に代表者を選出する権限を付与
- コミューンは事実上、白人商人和混血が主導
- 1914 初のアフリカ人国民議会議員としてブレーズ・ディアニユが選出される

教育制度

- 植民地主義の「同化」思想が最も純粋な形でみられる
- 1882ジュール・フェリー法
- フランス人の子ども達と同じ教科書を使用
- 自らの母語や文化は野蛮なものであると教えられる
- 開化民：フランス式教育で高等教育を受けた人、フランス市民権付与、官吏、弁護士、政治家などに
☞ (例) サンゴール前セネガル大統領 フランスの大学教授資格、アカデミー・フランセーズのメンバーに

同化政策の困難さ

- フランス文化とアフリカ文化の差
 - コミューン以外の住民でフランス市民権を持つアフリカ人は2000万人中2500人
 - 教育の普及：カトリック教団が初級学校建設をしたことを除くとあまり進展せず
- 👉 フランス領西アフリカ 初級学校就学数 1944年で7万6000人（当時の人口1500万人）

協力政策

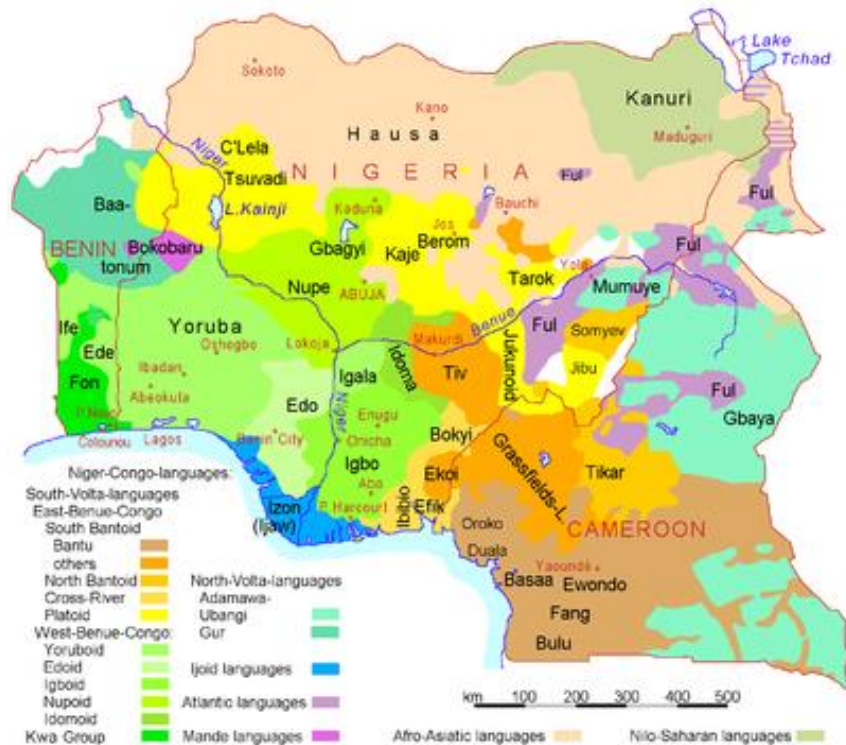
1923 植民地大臣アルベール・サロー 『フランス植民地の開発』出版

- 植民地事業＝双方の利益と幸福のため、両者の協力が必要
- 同化政策を変更 植民地省、中央政府、地方政府設立し、連合(federation)として管理
- アフリカ人の首長たち：地位や権限を奪われ、法的権限は拒否されるが、しばしば、強制労働の調達に協力、税金の収集に利用される

3 間接統治・分割統治

- ルガード: イギリス帝国主義の植民地行政官、間接統治をナイジェリアへ導入
- 各植民地 中央政府—州(province)—行政区(district)
- 総督 中央の行政総括、植民地内に強い権限もつ、ロンドンの指示に服従
- 行政協議会 イギリス人の官僚のみ関与
- 立法協議会 数人のアフリカ人

北部ナイジェリアの場合



植民地支配以前の北部ナイジェリア 王国・帝国

- * ハウサ7国:

- * 19C サハラ南縁 イスラーム改革運動

- * 1804 フルベ人のイスラーム導師ウスマン・ダン・フォディオが征服開始→ハウサ諸国も征服され、ソコト帝国建国

- イスラーム神権国家、イスラーム原理を基礎、王もイマーム、カリフ、シェイクといった宗教的な地位を表す名称

- 1900 北部ナイジェリア イギリスの保護領に、ルガードが高等弁務官に就任
 - ルガード 征服に際して協力的であったエミールたちに地位を保証、司法制度、管理制度も温存
 - ソコのスルタン
-
- 各地方のエミール：自身の応急を持ち、税を徴収、

注意

- 間接統治下の伝統的支配者 植民地化以前とは異なる
- 植民地化前 エミール ソコのスルタンと支配下の住民に対して責任を負う
- 植民地下 エミールの責任は植民地政府のみ、住民の支持を失っていてもその地位を失うことはなかった

間接統治の残した傷痕

- 間接統治 「伝統」を強化
- 北部ナイジェリア 宗教、衣服、建築、生活様式一般に至るまで外部の影響なし
- イギリス イスラームに対して不干渉を約束、イスラーム法(シャリーア)で裁判
- キリスト教伝道団の活動も制限
- 北部で 少数の学校(貴族のため)→ハウサ、フルベ 西欧的教育を受けた人少ない、専門的職業(石、技術者)も少ない
- 南部では、キリスト教、西欧的学校教育

なぜ間接統治を採用したのか？

- 人件費の削減 イギリス行政官に支払う給与＋その他のサービス 植民地政府の重荷に→行政官の人手不足
- 秩序の維持が容易 伝統的権威を保護することで法に基づいた秩序を打ち立てることができる
- 伝統的首長(エミールやパラマウント・チーフ)は原住民統治機構のトップに

3 ベルギー領コンゴ

三位一体的植民地支配

- ベルギー国王レオポルド2世の私有領(1885、コンゴ自由国を独立させ、元首に)→1908ベルギー領コンゴに
- 行政府、民間企業、キリスト教伝道団

- コンゴ盆地 広大な領土(西欧に匹敵する) ヨーロッパ人の「発見」が最も遅れた地域
- レオポルド2世 スタンレー派遣
- 植民地獲得の行動 ベルギーにおいては国民の指示あまりなし
- レ2世 コンゴ国際協会設立 領有権を主張、列強の支持を得るため無関税を宣言→イギリス、アメリカは事実上の主権を認める⇒ベルリン会議で「列強の一つ」と認知
- 1885・8・1 レ2世 コンゴ自由国の暴虐な君主に

圧政の実態

- アフリカ人住民が現在使用している土地以外は全て国有地と規定
- 国有地の天然資源
- 住民に対する人頭税 ゴムの採取
- コンゴのゴム輸出 急激に拡大: 1890 100トン
→ 1896 1300トン → 1901 6000トン (世界の総生産量の10分の1)

植民地政策の変更 政策の立案 議会と植民地評議会
経済構造変化 民間企業が**鉱業・農業部門**を牽引

* 銅 鉱業の中心 1910以降大幅に生産が拡大

- ユニオン・ミニエール 銅生産を一手に担う（1950代には平均して歳入の27%がユ社からの支払い）☞ユが立地するカタンガ州 中央政府にとって重要

* 農業

- ユニリーバ社の子会社、ベルギー領コンゴ搾油会社（HCB） 広大な土地利用権獲得、パームオイルを生産・輸出（ナイジェリアに次ぐ世界第二位の輸出）

* 文化・教育 キリスト教伝道団の影響力

- ベルギー アフリカの「文明化」 植民地行政の最重要課題、伝道団を最大限利用
- 1946まで世俗教育存在せず
- 初等教育進む 就学率10%
- 高等教育 大幅に遅れる

* 独自の文化発展

- 例 リンガラ(ザイール)音楽 世界的に有名に

4 ポルトガル領植民地

- ポルトガル 植民地化のきっかけとなるとともに最後の植民地帝国
- 旧ポルトガル領：ギニアビサウ、カボベルテ、サントメ・プリンシペ、アンゴラ、モザンビーク
- 地理的にポルトガル船の航路上に位置する、東方貿易の寄港地、16C～19C半ばまで奴隷貿易の拠点
- ポルトガル：16Cには長期的に没落、1932にサラザールが首相に、以後ファシスト的体制が続く

👉 イギリスとの絆が強く、ドイツと同盟を結ばなかった
ので、ファシスト政権は第二次世界大戦後も継続

- ポルトガルの植民地支配
アフリカ人に対数する教育、医療施設劣悪
60代でも非識字率 90%
- 特許会社 植民地内陸部の開発 ポルトガル人商人、
軍人、農場主が進出
- アンゴラ・モザンビーク
- アフリカ人は農村から追い立てられ鉱山やコロナト(入
植者の農場)で強制労働に従事
- 15歳以上のアフリカ人 人頭税
- アフリカ人農民: 農産物(コーヒー、ココア、綿花、落花生)
は安価で買いたたかれる

- 植民地エリートの育成
- ムラート(混血の住民): 19Cまで植民地運営に重要な役割果たす
- ムラートの人口比 カボベルデ70%、サントメ・プリンシペで7%、アンゴラ1%、モザンビーク0.5%
- サラザール政権 ポルトガル本国から入植者が植民地経営の実権を握る
- ムラート 1960代 積極的に独立運動に関与
- アシミラド(同化民): 1914以降、アフリカ人の中で一定の資産を有し、ポルトガル語を流暢にしゃべり、ヨーロッパ風の生活をおくり、犯罪歴ない者に付与

なぜポルトガル植民地の解放は遅れたのか？

1) 植民地における軍事支配（ポルトガル本土でも）

- サラザール体制の批判、植民地解放支持の世論を弾圧

2) イギリス、アメリカのポルトガル植民地支配の支援

- イギリス 白人支配が続く南アフリカ、南部アフリカ（特にローデシア）に利害を持つ
- アメリカ 鉱物資源に関心

3) 植民地 ポルトガル人移民の急増

- 従来植民地(モ、ア)は囚人の流刑地
- 第2次世界大戦後 ポルトガルの農村の困窮化→植民地 ポルトガルの余剰農民のはけ口
- アンゴラの白人人口

1904 4万4000人(1.2%)→1970 29万人(5.1%)

👉ポルトガル人の大部分 「粗野」でアフリカ人を見下していた

まとめ

◎植民地政策の共通性

ヨーロッパ文化の普遍性・絶対性を前提

アフリカ文化＝アフリカ性の否定

今日のアフリカ諸国が直面する諸問題の要因となる

民族対立、民族内の対立

政治体制（ガバナンス）

低開発・貧困・経済問題

主な参考文献

- 宮本・松田『新書アフリカ史』講談社現代新書
- 北川・高橋『アフリカ経済論』ミネルヴァ書房